

研究の守破離(3) 理論でなく現象ファーストであれ

研究推進委員の小菅です。前々回掲載した声の中から今回は以下を取り上げます。

理論の話って研究論文に入れなくてはと思うけど、理論の勉強って難しいし退屈だし、どう取り入れればいいのか…？

私事ですが、妊娠中の期間を使ってずっと挑戦したかったキャリアコンサルタント養成研修を受けました。普段の業務で「理論」という言葉に馴染みがないという研修仲間が漏らしていたのが上のような理論学習の難しさです。確かに理論ときくと固い印象で、とっつきにくさを感じますよね。ただ仲間の話を聴くと「部下が成功体験を重ねられるよう意識している(…それは自己効力理論の話?)」「生徒が目標を立てて振り返りをする時間を設けている(…それは自己調整理論の話?)」のように、実践と理論が結びついているように思えました。その実践はまさに理論で扱う内容ですよと伝えたら、驚かれるのと同時に、自分の実践に不安があったが研究上も良いとされているようで嬉しい、とほっとする姿が印象的でした。少し理論に親しみが湧いた、との感想も。そういえば私も自分の研究には不安ばかり感じてしまうし、自分のしていることの価値に自分では気づきにくいから拠り所になるものが欲しくなるなあ、としみじみと思ったものです。

私は就職活動(就活)の研究をしています。日常の中で「学生の就活はなぜか行き当たりばったりな様子だから(問題・疑問)、もっと深く情報を集めてほしい(結論・主張)」と考えます。そうするためにどんな方法があるだろう?その方法は学生のために効果のある妥当なものであってほしい。私は支援の経験値が少なかったので、方法を考えるにあたり参考にしたのが理論です。理論は先人たちの集めた知識の塊だからです。例えば発達理論なら、キャリアの成熟には時間(年齢)を必要とすると考えます。つまり「学年があげれば自然と深い情報を集めるようになるはず(=仮説)」です。個人の考え方に焦点をあてた目標設定理論なら、活動のできなさや不十分さは、目標がない/不明瞭であるためと考えます。そこで「情報収集をがんばる」ではなく「○○の情報を集める」のように「具体的な目標を立てれば深い情報収集ができるはず(=仮説)」です。多くの理論が経験の浅い私に様々な方法案をくれ、その中から最も自分の感覚と目の前の現象にフィットしそうな理論を選んで問題を解決すべく研究をしました。理論ありきで研究を始めたわけではなく、目の前の問題ありきで理論を利用しました。

前回書いたように、研究は問題解決の営みです。皆さんも何かしら解決したい問題や疑問があって、理想とする状態があるはず。そのための方法として、経験のある方なら「こうすればうまくいく/うまくいかない」を持っているとも思うのです。これは「持論(theory-in-use)」といわれ、それ自体が研究対象にもなっています。持論も理論の仲間と考えれば、理論って身近なものでしょう?自分の経験や持論を、先人たちの残してくれた理論に照らして省察してみれば、それが研究になります。理論に振り回されず、理論を利用しましょう。ただしご利用は計画的に!
(駒沢女子大学 小菅清香)